
会津遊一 短編集

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会津遊一 短編集

【コード】

N0167M

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

一話完結の短編集です。続き物はありません。

のマークが付いたものは200文字で書いています。

昔の男

「最近」

「何？」

「いやさ、最近平和だと思ってね」

「ああ、そつだねー」

「この平和のまま。事件なんか、ずっと起こらないと良いよねー」

最近。

昔の男が、アタシに復縁を迫ってくる。

それも執拗に。

毎日、電話を掛けてくるし。

毎日、玄関の前で、出社するアタシを待ち伏せしてる。

ウゼエ。

マジ、ウゼエ。

そんなの最悪に等しいじゃん。

アタシに言わせれば、昔の男つてのは二日酔いみたいなもんだ。

胸くそ悪くなるだけで、良い事なんて何も無いし。

相手の言葉を聞いてるだけで、頭がガンガンと響くし。

肌に触れられると、嘔吐感がこみ上げてくる。

昔の男なんてさ、糞ウゼエだけじゃん。

その日も。

いつものようにアタシが家を出ると、また彼奴が待っていた。

子犬みたいに尻尾を振って、アタシが話し掛けるのを待っている。

その面を見てるだけで、血圧が上がった。

一発、ぶん殴ってやりたかったが、早朝なので周囲にはサラリーマン達が駅に向かって大量に歩いている。

アタシは、チツと舌打ちした。

どう考えても、こんな往来で殴ったら警察を呼ばれるのがオチ。

昔の男なんか、無視して歩くのがベターだろう。

そう思うのだが。

歩き出すと、アタシの背後から楽しそうに話し掛けてくるのだ
た。

この後、何処かにデートしないかとか。

思いでの場所を探そうとか。

良いレストランがあるとか。

ああー、もうウゼエな。

「ちょっと」

と言つて、頭にきていたアタシは足を止めた。

そしてヘラヘラと笑っている昔の男の、襟首をガシツと力任せに
掴んだのである。

「アンタ、ちょっといい加減にしなさいよ！ デートなんか、する
ワケがないでしょ！ 昔の男ってだけで、どんだけ思い上がってる
のよ！」

そうアタシが怒鳴り散らすと、昔の男はモゴモゴと何か呟いてい
た。

だが、そんな戯言に耳を貸す程、アタシは暇じゃない。

「黙りな！ 大体、アタシは平日の昼間ツから女の尻を追いかけて
いるような、だらしない男は大嫌いなんだよ！ 見なよ、他の男
はこれから会社に行って働くんだ。汗水垂らしてな！ アタシに好

かれないなら、まずは仕事を全うする事から始めるんだね！」

と言い残し、アタシは颯爽と去っていった。

聞き耳を立てると。

付いてくる足音はしない。

どうやら昔の男は呆然と立ち尽くして、暫く動けなかったようであつた。

その後。

風の噂によると、昔の男はアタシの言葉に心を打たれ、言われたとおりに自分の仕事に戻って努力する日々を積み重ねているらしい。

ふふ。

やるじゃないか。

男は、そうでなくっちゃな。

今は無理だけど。

いつか。

その内。

菓子折の一つでも持って、昔の男の顔でも拝みに行つてやろうかね。

仕事場で、どんなツラしてるんだろっ。

そう考えると、アタシは自然に笑みを作っていたのだった。

「最近」

「何？」

「いやあ、最近、物騒になったな、と思ってさ」

「そうだねー。立て続けに強盗殺人や誘拐殺人、はたまた痴漢殺人事件なんてのも起こってるしな。イヤな世の中だよ」

「本当、イヤになるねえ。何も、そこまで人を殺さなくても良いよなー」

「ああ、全くだ。地獄の閻魔様も、ちょっと頑張りすぎてるよなー」

初めてのファンタジー

「なんじゃこりゃあああああああああああああ！」

俺は隠していたお気に入りのお宝が入りのエロ本が弟に盗まれてしまった時のように絶叫していた。

だってよ。

昨日は学校から帰宅した後。

PSPでゲームやって、ちょっとネットしつつ音楽を聞いて、そして普通に寝た。

7

間違いなく、布団にパンツ一枚で潜り込んだ筈なんだ。

が。

起きたら世界が変わってた。

もう根本から違う。

可愛い女の子が出てくるエロ漫画を読んだら、それが急にファンタジー言ってる洋物のAVに変化してしまった程度じゃない。

これは、普通の日常なのに、人を殺して誉められるようなものだ。

これが笑わずにいられるかってーの。

ゲームや漫画の設定だとありがちかもしれないけど、いざ自分が異世界に来たとしたら、これほど楽しそうな事は無いじゃないか。

まるで自分が物語の主人公にでも慣れたような高揚感で、俺は心臓が激しく脈打っていた。

「かーーーーー、やべー！俺ってラッキーじゃん！」
と。

一人で悶えていたら。

俺の存在に気が付いた一匹のトルルが、こっちに向かってきたのである。

まるで全ての生物を踏みつぶそうとする勢いで突進し、口元からヨーグルトのように半透明な液体をベタベタと溢していた。

トルルは、俺を食う気なのだろう。

頭から骨をバリバリと噛み砕き、血の一滴すら逃がさないように飲み干すつもりなのだろう。

普段なら、ギッヨとしている所だ。

しかし、俺はあえて動かなかった。

実はちょっと前に思い出したのだが、俺はこの世界に来る時、神

様って奴に合ってる。

始めは夢としか思えなかったし、気にしても居なかったから忘れてたけど。

今では、そのジジイが本当に神様だって確信していた。

だってよ。

俺がピュッと腕を振れば、手の平から炎が生まれるんだぜ。

ライターぐらいの小さな奴じゃなく、2千円ぐらいで売ってる花火のセットを一度に燃やしてしまったぐらいの炎が、俺の掌に浮かんでいるんだ。

これはどう考えても、魔法って奴だろ。

MPが減ってるのかどうか分からないけど、自分の意志で唱えているのは確かだった。

だって神様と合った時に尋ねられたんだぜ。

「何か、欲しいモノがあるか？」

ってな。

タダで貰えるモノはなんでも貰うつてのが俺の信条だったし、俺はスゲー力が欲しいって言ってやった。

それが本当だったって事だろ、これ

「ふへへ」

そりゃ、笑うしかない。

異世界に来て、スゲー力を貰った。

RPGのゲームで、始めっからレベル99でやるようなもんだ。

俺を襲おうとしているトルルなんか怖くない。

と。

意気込んでいたら、シュツと食う気を切り裂く音がした。

そして、次々と弓矢がトルルの前の大地に突き刺さっていく。

何が起こったんだ。

「おい、坊主。こっちだ！ 早くこっちに、こいつ！」

混乱していた俺を余所に、そう叫んでいる方に目をやると、二人の男性がトルルに向けて弓の糸を引いていたのだ。

どうやら、襲われている俺を助けようとしているらしい。

俺は、別にそんな必要はない、って言おうとしたけど、出来なかった。

その時の男性達の顔を見たら、つい素直に従ってしまった。

だって、泣いているようで怒っている、そんな不思議な表情をしていたんだ。

必死に忠告する人に対して無碍な態度をとる事は、俺に出来なかった。

そして俺が二人の元に辿り着くと、まるで引っ張られるようにして逃げ出したのであった。

怒って追いかけてくるトルルを振り切り、何とか助かった俺達は草葉で休んでいた。

ゼーゼーハーハーと荒い呼吸が止まらない。

だが、聴て落ち着いてくると、俺を助けた2人の男は、どちらからともなく笑いだしていた。

聞けば。

なんでも、あんな化け物から人を助けたのは初めてらしい。

最初は見捨てようかと思ったのだが襲われている子供の俺を見て、ついわが子を思い出し、気が付いたら弓で攻撃していた、との事だった。

「いやー、助かって良かったよ」

「全くだ。こんな奇跡、そうそう無いな」

「だな。ただ、ちょっと下半身が、小便臭くなったのはお互いの秘密にしようぜ」

「ああ、助けに入ったのに怖くて洩らしたなんて、格好がつかないからな」

そう言って、また二人は笑っていた。

俺をほっというて。

「へー、そうなんですか」

と相槌をしている俺は、ちょっと不機嫌になっていた。

だってさ。

あんなの、俺の力を使えば何とでも出来たし。

助けてもらう必要なんか無いのに、助けてやった的な空気を出しているのが気に食わなかった。

っーか、逆に助けてやったっーの。

今更だが。

俺は、この世界に来た時から素っ裸になっている。

理由は分からないが、きっとターミネーター的な奴だろう。

スゲー力を神様に貰って有頂天になっていたので、暫く忘れてた。

まあ、仕方ない。

とりあえず全身がスースーする俺は、下半身がビチヨビチヨになっている男二人の住んでいる村に向かう事にした。

一旦、服がないって気が付くと恥ずかしくて仕方なかったし、一応助けてくれた人から服を奪い取るようなマネは出来なかったし、二人が服をくれるというので付いて行く事にしたのだった。

そして何より、行き先にアテが何もないのも事実である。

ゲーオタとしてはフィールドが広大なRPGのマップを探索するのも好きだけど、やっぱり最初ぐらいは目的って奴が欲しいしね。

しかし。

そういう俺の利己的な考えとは裏腹に、村の人々は俺を温かく迎え入れてくれた。

一つの小さな小屋に二十人ばかりの男や女が集まり、まるで正月の宴のように持て成してくれる。

見知らぬ俺のために風呂を用意してくれ、服の寸法を合わせてくれ、ご飯を用意してくれたのだ。

悪いけど、それは以外だった。

俺を助けてくれた男2人もそうだけど、彼らはどうみても裕福そうではない。

家は木造平屋、質素な獣の皮を身に纏い、満足に食事をしていないのは痩せこけた頬を見れば直ぐに分かった。

年老いた老人などは皮と骨だけになっている。

どう見ても生活が苦しそうなのに、何故俺を助けた上に、ここまで持て成してくれるのだろうか。

不思議だった。

やがて俺は、食べかけていたフォークをテーブルの上に食器を置いてから尋ねた。

「あの」

「なんです?」

と、村長らしき老人が答えた。

「あの、どうしてここまでしてくれるんでしょうか?」

「ここまで、というのは?」

「いや、だって、皆さんは俺の名前すら知らないじゃないですか。」

それなのに、どうして助けてくれるのか、分からなくて……」

そう俺が言い終わると同時に、村人達は笑っていた。

水みたいに薄い酒を片手に、木の皮に付いている樹液を摘みながら。

笑い声が絶えない中、村長は俺に言う。

「だから、ですよ」

「え」

「私達だって、人助けをしている余裕なんかありません。日々の食事だって困ってますし、この村の近くでは各国との戦争が起っています。本当は他人なんか気にしている余裕はない、というのが本音です。でも、だからこそ、明日死ぬかもしれないからこそ私達は人を助けよう。そう、村人達の間で決めたんですよ」

「……そ、そうなんですか」

「ええ。最後ぐらい、胸を張って死にたいですからね」

そう村長が言うので、俺は口が開けなくなった。

さっきまで異世界に来て喜び、スゲー力を貰って楽しんでいた自分がバカみたいに思えてきたのだ。

ガキみたいに取るに足りない事で、何を一喜一憂しているんだと。

村長の顔が半分に潰れた。

一瞬にして、まるでベーコンのように薄くなり、血の赤と油の白に変貌したのである。

間違いなく即死だった。

そして、今度は確実に聞こえる音で、俺の側に立っていた女の人
が死んだ。

次は窓際に居た男の子が。

その次は。

次。

小さな小屋の中に居た筈の人間達は、次々と黒い何かに押しつぶ
されて死んでいった。

「あ……」

俺は動けなかった。

怖くて。

ただ、ジツと、見詰めるだけであった。

俺の手には、まだ生暖かい村長の死体がぶら下がっている。

さつきまで苦しくも、胸を張って生きようとしていたのに。
と。

考えていたら、誰かの叫び声がした。

「敵襲だー！」

それを聞いた俺はハツとしたように死体の手を振り払ってから、
小屋の外に飛び出した。

すると、そこには惨たらしい光景が広がっていた。

まだ昼間だというのに。

大地が赤い。

雨が降っていないのに。

大地が濡れている。

外では、大量の人間による殺戮が行われていた。

黒ずくめの其奴等は、水平にした太い木々を滑らせ、家屋に向か
って体当たりしていたのである。

それに巻き込まれてしまったら最後。

人間などは、ダンプカーと衝突した如く、ミンチになってしまう。

いや、現に村の半分は潰れていた。

無論、中に居る人間も。

「や、やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

気が付けば、俺は叫んでいた。

何か、生物として許せない琴線に触れたのかもしれない。

自然と涙がこぼれ落ちていた。

さっき食べたスープと胃の中に入り込んでいた残骸が、まるで黄色いゼリーのような形となって逆流していた。

が。

俺は我慢した。

まるで、それが溢れてしまうと、俺を助けてくれた二人の男や村長達の記憶が流れ落ちてしまうような気がしてイヤだった。

「くそー……」

俺は口元を抑えてから手を前に突き出した。

瞬間。

手が光り、爆発した。

と。

腹に決め、俺は手を伸ばす。

が。

誰も生き返るなんて、事は無かった。

考えても、みてくれ。

落ちている木の枝をへし折るのは簡単だが、それを元に戻そうとすると現代の科学力でも不可能に近いだろう。

そして何より、俺が神様からもらったのは、スゲー力、であつて。

具体的に何が出来るのか知らないし、知った所で力を使える技術があるワケじゃなかった。

死んだ奴が生き返らないなんて。

全ては当たり前の話だった。

それからの俺の人生は悲惨なモノだ。

楽しい事なんか一つもない。

煮えた鉄の塊を飲み込んだような苦しみがあるだけ。

いつそ全てを忘れて悪にでも染まれば良かったのだろうが、俺には無理であった。

ただただ、村長さんや助けてくれた人達を元に戻すだけを考えて暮らした。

幾度となく破壊と、生物の再生という実験を繰り返した。

遺骨の欠片を集めた墓の上で、俺は孤独に生き続けた。

「やった。……やったぞ」

そして気が付けば、20年という時間が経っていた。

ついに俺は、自力で復活の呪文を作り上げたのである。

何度も絶望の淵に手を掛けて自殺しようと考えたが、それでも俺はやり遂げたのであった。

無論、まだ完成ではない。

肉体が無くなってから時間が経ちすぎているので、全てを一度に戻す事は出来ない。

が。

それでも一時的な代用品である泥の固まりに、死者の魂を入れる術を手にしたのであった。

「よし、これで良い」

全ての作業が終わった後、俺は祈るように俯き続けた。
すると、聴て声がした。

記憶の微かに薄れてしまっていた、村長の声。

「誰だ……？」

「おお！ そ、村長さんか」

「……ああ」

「やったあああ！」

俺は喜んだ。

成功したのだと喜び、舞い踊りたい気持ちが沸いていた。

「村長さん、俺だ！ 俺だよ！ 20年前、助けて貰った俺だ！
分かるかい？」

そして俺が、泥の手の部分を握りしめながら尋ねると。

予想もしていなかった言葉が返ってきたのであった。

「……あ、あの時の子か。……ふざけんな。ワシ達を殺しやがって。
このクソ野郎。死ぬ、死んでわびろ。あああああ」

と。

繰り返し、繰り返し。

罵られた。

そして気が付くと、俺は泥人形を破壊していた。

そのままボタンと倒れてしまう。

涙がこぼれる。

俺は、こんな事を言われるために、20年も頑張ってきたのだからか。

ありえねえ。

あの時の事件は、俺にだって責任はあるが、俺だけが悪いワケじゃないだろう。

くそ。

なんか、もう、どうでもよくなった。

なんだこれは。

何なんだ。

信じられない。

現実に、今まで見た事は無いだろ？

俺だって、見た事は無い。

そう。

これは全て。

俺の、初めての夢。ファンタジー

究極のイス

長年連れ添った妻の様子が最近変わった。

部屋に独りで閉じ籠もり、夜は湿った息を何度も吐く。

たぶん痴呆だろう。

そこで天才科学者のS博士は、ある発明を完成させた。

「それが、この究極のイスですか？」

と若い助手のN。

「ああ。座るだけで脳細胞が元に戻る。ただ長時間だと、戻りすぎて胎児化してしまうが」

するとS博士は、強引にN助手に着座させられた。

「な、何をする」

「貴方が痴呆になれば、私と奥さんが助かりましてね」

本心を映し出すカメラ

S博士は助手のN子と研究に打ち込み、ついに発明を完成させた。

「それが、このカメラね」

「ああ。撮影すれば、どんな人間の本心でも映像化できる。どれ試しに一つ」

S博士がN子を撮ると、そこには指を丸め、両手でハート型を作っている可愛い姿が写っていた。

「完成だ！」

と、喜ぶS博士の首を、N子は突然に背後から絞めたのだ。

「貴方が死ねば権利は私のモノよ！」

喉を指で潰そうとするN子の両手はハート形になっていた。

吸血鬼？

私はブスだ。

それは自覚しているし。

生まれ付きの容姿に文句を言っても仕方ない。

でも、だからって頭を叩かれる理由にはならないでしょ。

ある日。

突然、クラスの全員に叩かれたのだ。

いくら何でも酷すぎる。

私が何をしたというのだろうか。

持参した弁当を舐めていただけなのに。

許せない。

私は叫んだ。

「どうして皆で私を叩くんですか！ 折角、お弁当の生肉から血を啜っていたというのに。血を溢したら、勿体ないじゃないですか！」

サイキョーのボクサー

その男はサイキョーのボクサー。

全ての能力が世界王者クラス。

ただ戦績は0勝0敗24NCと勝った事が無かった。

それでも男は諦めず、試合を決意した。

対戦相手は4回戦ボーイ。

楽勝で勝てる。

だが突然、4回戦ボーイはレフリーを刺し殺したのだ。

なんでも恋仲の纏れだったそうなの。

当然、試合は無効、警察に連行された。

「なんで俺の試合だけ殺人事件が起こるんだ！」

その男は誰にも勝てないし、誰にも負けない。

最凶のボクサー。

そんな奴は知らん！ ガチャ！

夜中にドアが叩かれ、寝ていた俺は起こされた。
が。

外に出ても人影は無い。

訝しみつつドアを閉めたら、またやられた。

それが数回も続く。

流石に頭にきた俺は、掴まえるべく待機した。

そして、また叩かれた瞬間にドアを開くと、

「ギャ！」

そう叫び声がした筈だが、人影は無かった。

部屋に戻ると、お袋から電話が来た。

「夜中に何」

「それが泥酔してた父さんの顔に痣ができて、お前の名前を言っ
ては謝ってるんだよ。何か知らない？」

そのまま人類滅亡説を確認するのはどうだろうか？

僕が。

部屋から窓の外を眺めていたら、幼女がトラックと衝突した瞬間を目撃した。

それを見て直ぐに分かった。

即死。

まあ、よくある話だ。

と。

考えていたら、僕の背後にさっきの幼女が現れた。

「人の死を見て何も感じないの？」

「もう化けて出たのか」

「ええ。直ぐに、高みの見物をしてる奴に死ぬまで離れられない呪いを掛けたくて」

「良いけど。でも僕も死んでるよ」

「え！」

「幽霊が相手だと、呪いはどうなるの？」

「……カズ」

シオ喰ウ女

死んだ。

私と付き合った男は皆死んできた。

それも30年の間に18人。

デートして、セックスしたら皆死んだ。

何なんだ、それ。

何で私が愛した男は、全員死んでしまう。

私は死神かよ。

「はは」

私は自虐的に笑い、芋焼酎のロツクを一気に煽り、粉を付けて指を舐めた。

すると、心配した妹が近寄ってきた。

「お姉ちゃん、またお酒のツマミだけを舐めてるのね」

「うっさい！」

と、私は妹を追い出した。

私は塩喰う女。

それがお似合いだ。

とあるMの喜び、と悲しみ

痛い。

ビシッと音を立てて、俺の体にムチのように鋭い刺激が走った。

部位の細胞が死に、そこだけ発熱する。

痛い。

が。

気持ちいい。

体が痛み付けられると、下半身が熱くなってくる。

自分が如何に獣なのかと教えられ、皮膚の穴から臭いが抑えられないぐらいの性衝動が沸き上がった。

もっとだ。

もっとやってくれ。

と。

悶えていたら。

顰めっ面をした妹が、俺の部屋に入ってきた。

「お兄ちゃん、五月蠅いから1人SMは程々にしてよね」

未来の映画館

私は、かなりの映画好きだ。

A級B級は当たり前として、地方単館クラスのC級映画も全て見て回っていた。

当然、それだけではない。

国内で上映されていない映画だって全て網羅している。

わざわざ海外からメディアを取り寄せたり、スタッフに金を払ってオリジナルからコピーして貰っているのだ。

そして、それらを映し出す自宅の設備も完璧。

再生機と音響機器、映像機器が高額なのは当たり前として、大切なのはケーブルである。

この間を取り持つ線が2流だと、全ておじゃん。

劣化した映像など、jpgにも負ける。

因みに私は一メートル5万円はする純国産の映像端子を使用している。

更に、部屋の中には映像機器関係以外は設置していない。

何か家具があると邪魔になる。

映像を見る時、音や映像に微弱な影響を及ぼすからである。

ふふふ。

私は、雅に自他共に認めるマニアと言える。

今日は、そんなマニア達が集う映画祭に出席する事になっていた。

チケットは一枚100万円。

一晩に一回だけの映画としてはかなり高額だが、マニアの中のマニアの集いなら仕方ないというものさ。

金なんか惜しくない。

そこに集まったという、マニアとしての名誉が欲しかった。
と。

考え、映画館の中で待機していたのだが、一向に上映会が始まらないのである。

どういう事だ。

私は呆然としていたら。

突然、辺りから歓喜の声が上がりましたのである。

「素晴らしい！　こんなスクリーンの素材は見た事が無い！　ビーズ、パール、マットでは放てない光沢がある！」

「いやいや、此方の壁も見て下さい。素材と音響角度が素晴らしい。分度器で測っても、1ミリ単位の狂いがない」

「この椅子だって、最高ですよ！　座り心地よりも、映像の視野角と光りを微妙に剃らすように計算されている。これから肉眼でも劣化が少ない」

その声を聞いて、私はハツとした。

なるほど。

そういう事か。

今日の集いは、映画マニアによる映画館の閲覧であったのだ。

私はてっきり映画を見るのだとばかり考えていた。

ある意味、一般人と同じ思考だったのかもしれない。

私はマニアとして、まだまだという事だろうか。

いや。

男として、マニアとして。

負けたままでは帰れない。

探せば、まだ勝ちの目はあるだろう。

マニアの血が疼いた私は、遅れを取り戻そうと歓喜の声を上げている人垣に颯爽と駆け寄り、強引に体をねじ込んでいったのであった。

「始まったな」

全ての光景を映画館の館長は眺めていた。

そこに、警備員が話し掛ける。

「今日も大盛況のようですね」

「ああ」

「しかし、段々、騒ぎになるまでの時間が短くなってますね。サクラは何人雇っているんですか？」

「いつものと同じ。2%って所だよ」

「そんなもんなんですか。しかし、どうして彼らは、ここが古い映画館だって事に気が付かないんですね」

「それがマニアって事だよ。勝手に価値を見付けてくれて、勝手に評価をしてくれ、勝手に高額の金を支払ってくれるのさ。マニアとは、実に素晴らしい存在だよ」

未来の映画館（後書き）

どうやっても2000文字に収められませんでした。
まだまだです。

究極のフライパン

「私は、ついに究極のフライパンを完成させたぞ」

と、天才科学者のS博士が喜ぶも、助手のN子は睨み返す。

「……そう」

「これは自動温度管理、回転センサー、焦げ目付き機能からテレビ、電話、クーラー、PCでネットも出来る。しかも、触れた全ての物質の賞味期限が分かってしまうのさ」

と。

言った時、N子はフライパンを奪ってS博士を撲殺したのだ。

「奥さんと別れないからよ」

フライパンには、賞味期限切れと表示されていた。

異生物の恋

君は、美しい。

青い大空を自由に羽ばたき、雲の隙間を通り抜け、何処までも飛んでいける。

それに比べて私は醜い。

川辺に積み重なったヘドロのように臭く、大きく、汚かった。

どうして。

どうして私達は、こつも違つのだらうか。

私は君の側に居たいのに。

と。

見上げていたら。

君が突風に煽られ、落下してきたのだ。

私は助けようと思い、慌てて駆け寄る。

が。

君は私の顔に向かって落下してきたので。

つい。

ごくん。

「あ、えい……」

不老不死だけど

天才科学者のS博士は長年の研究の末、ついに不老不死の薬を完成させる事が出来たのだった。

「わははは、私は人類の夢を手に入れたぞ！ これで私は永遠に生きられるし、お金持ちにだけ不老不死の薬を売りさばけば大金がゲツト出来る！」

と。

言って、薬を飲み。

地下研究所で喜んでいたら、突然隕石が建物のコンクリートをぶち抜いて落下してきたのだ。

「え」

と、驚く暇もなく隕石はS博士に命中してしまったのであった。

その衝撃は凄まじく、体躯は散り散りになってしまった。

だが、不老不死となったS博士は、それでも生きていた。

「くそー！ 折角、金持ちになれると思ったのに。何としても元に戻ってみせるぞ！」

それからS博士は執念だけで80年という時間を掛け、1ミリず

つ動いて手足の細胞を繋ぎ。

120年で体を構築し、500年で頭を復元したのであった。

「よし、体が元に戻った。完全復活だ！　これから薬を売りまくるぞー」

と。

S博士が喜んで地下研究所から外に出るも、全人類は既に機械の体を手に入れて不老不死になっていた。

いい女

「俺の愚痴を聞いてくれよ。友達だろ」

「どうした」

「さっき女をナンパしたんだが、金持ちで二枚目、頭が良くて友達
思いの俺がフラたんだ」

「珍しいな」

「だろ。あのクソ女が」

「何て断られたんだ？」

「世話になってるがバカは嫌いの一言だけなんだ。初対面なのに意
味が分からないだろ」

その時、遠くに美女が見えた。

「あ、彼奴がそのクソ女だ」

「……なるほど。お前がフラれるわけだ」

「どうしてだよ？」

「アレ、俺の女房だもの」

せいじか様

「あー、彼奴らウルセーな」

「こっちが遠慮したら付け上がるしねえ、せいじか様は」

「ああ、そうだ。偉そうにしゃがって」

「この不況で私達は満足な食事も出来ないのにさ。これ以上やられたら、こっちも耐えられないよ」

「それが彼奴らの本能だからな。一回、バーンと叩かれないとこっちの痛みが分からねーんだよ」

ハエ目系角亜目力科。

セイジ蚊属。

名の由来は動物学者の誠二^{せいじ}さんが新種を発見した事に関係しており

今時の魔法のランプ

「やっと見付けたぞ！」

ある所に、とてもとても気難しそうな、凄腕の冒険家が居た。
その男は冒険に次ぐ冒険の果てに、洞窟の奥で魔法のランプを発見したのだった。

「わははは、封印されていた私を復活させてくれて礼を言う！ 代わりに願いを言え。どんな願いでも3つだけ叶えてやる」

早速、ランプを擦るとモクモクと煙が吐き出されて巨大な魔神がそう叫びながら現れたのである。

だが、念願の宝を前にしても、凄腕の冒険家は顰めっ面になっていた。

「……ちょっと待て、ランプの魔神」

「何だ？」

「とりあえず、その煙を止める。髪に臭いが付くから」

「え」

「早く」

「いや、この煙は私のやり方というか、そういうものでして」

「そんなの知らねーよ。初対面で、他人にルールを押しつけるなんて」

「……あ、ああ。じゃあ、願い事の1つってことで処理します」

「それと洞窟で大声とか無し、反響して耳が痛いから」

「え？」

「痛いって」

「あ、すみません。では、これも願い事で……」

男はチツと舌打ちをする。

「もついいよ。帰れ」

「あ、はい。……でも、願いがあと一つ」

「もー、煙で髪がべた付くし、そんな気分じゃないから。帰れって、マジで」

「……あ、はい。すみませんでした」

「謝れば良いってもんじゃないだろ。他人が嫌がることをするんじゃないよ」

「……はい。すみません」

「お前、さっきから、すみませんすみません、って謝ってばかりじゃないか。何、それが魔神のやり方なの？」

「すいま し、失礼しました」

「もう、消えろって。あー、苛つくわー」

とりあえず3つの願いを叶えた魔神は、肩を落としつつ素早くランプの中に返っていった。その時、困った顔で「人間って変に気難しくなったなあ」と呟いていた。

文学の文学の終わりであり始まり

僕は文学って奴が嫌いだ。

大抵、独り善がりの価値観や偏屈的なキャラクターを作り上げているだけで、小説の作りとしてベタベタな演出の物語が多い。しかも、心が弱いのだの、人を殺したただの、強姦されたただの、恋人が奪われたただの、時代に狂わされたただの。人間としての自然な苦しみを共感性の高い文章で纏めただけじゃないか。

下らない。

僕が生まれついでての天の邪鬼ってだけかもしれないが、そんなのより頭空っぽにして読めるアクション小説の方がマシだね。

100歩譲って、過去の名作と呼ばれる作品達は時代性の参考として評価するのならまだ理解できるが、今の時代の文学は全てカスに等しいとしか僕には思えない。大抵、ちっぽけな性欲の衝動が顕示欲に踊らされるだけで、薄っぺらい人生を歩んでいるのが文面から伝わってくるからである。

単純な性欲、暴力、弱者に取り憑かれている自分が好きだけなんだよ、文学ってさ。

まあ、いつの時代でも愛って奴に囚われてしまつのは理解できるよ。生物として異性に惹かれるってのは当然だし、それが人生の中心にあるのもまた事実なんだから仕方がない。

最近の寿命を延ばす研究だと、長生きできる代わりに副作用としてホルモン分泌が低下し、結果的に性欲と仕事の欲が同時に消えてしまつんだとか。そんなだったら長生きする意味が無いようにも思えるけど、人間の脳みその中で異性って奴に対する欲望ってのは

とても大事な所にあるんだろうね。

「あ、お待たせー」

「広場に立っていた僕に話し掛けてきたのは、同じ大学に通っている素心ちゃんだった。」

「うんうん、全然待ってないよ」

「あ、そうなんだ。ちよつと大学の売店で買い物してたから遅れちゃったと思ってた」

「そう言つと素心ちゃんは自分の腕を付けていた時計を見ようとしていたので、（何せ本当は30分も遅刻している）僕は慌てて別の話題を振ることにした。相手に気を使わせちゃ悪いしね。」

「ああ、そう。それで、何を買ったの？」

「え」

「売店に行ったんでしょ」

「別にフツーよ」

「普通って？」

「すると素心ちゃんは、はにかんだように微笑んだ。」

「もー、イヤねー。本当に大した物は買ってないわよ」

「だってさ、大学の売店なんて、ちよつとした物しか売ってないし、何より高いじゃないか」

「あー、それはあるある。シャーペンなんて200円もするものね」

「今時、そんなのを買うのは、次の講義に間に合わない人ぐらいだよ」

「僕が意地悪そうに言つと、素心ちゃんは雲一つ無い青空のように澄み切った顔で笑いだしていた。」

「ねえ、それって私の事を遠回しに言ってるんでしょ？」

「あははは、バレた」

「ふふ、私の次の抗議は3時間後よ」

「そうなんだ」

「でも、それ気をつけた方が良いわ」

「ん、何が？」

「その言い方だと、私がシャーペンを借りられる友達がいる奴、って遠回しに聞こえるから」

それを聞いて僕は目を丸くしてしまう。

「ええええええええええええ！ いやいやいやいや、ぼ、僕はそんな意味で言ったんじゃないよ！ 素心ちゃんをバカにするつもりなんて無いし、素心ちゃんには友達が沢山いるのも知ってるし。ただ、世の中の道理として、そういうパターンが多いって気がして……」

「分かってるわよ。だから、気をつけた方が良いって先に忠告したんじゃない。悪気が無くても、相手を傷つけてしまう言葉だってあるんだから」

「……う、うん。ごめん」

「別に謝り必要なんでないわ。友達でしょ」

そう悪気もなく話す彼女を見て、一瞬、僕の心はズキッと痛んでいた。

友達。

つまり、そういう軽い言葉を掛けられるぐらいの関係なのである、僕は。

素心ちゃんは、まるで和服が似合いそうな艶やかな顔作りと触ったら吸い付きそうなくらい白い肌の美人で、その穏やでサッパリとした性格から大学内でもかなり人気があった。勿論、全員からアンケートをとって回ったワケではないが、今のように歩いているだけで道行く男達の視線が真実を語りかけてくるのであった。

その度に、隣を歩く友達の1人である僕の心は、どうしても鈍い痛みを感じずにはいられなかった。

「あれ、じゃあ、シャーペンはなんで買ったの？」

大学内にある食堂に向かっていた僕達は、その道すがら素心ちゃんに尋ねた。

「んー、休み時間に書きたくてね」

「シャーペンで？ それだったらパソコンでやって、プリントアウトすればいいじゃない」

「んーん、それじゃあダメなの。最初から楽をすれば、きっと色々甘えてしまう。だから、私の手で、一文字一文字、意味を込めて原稿用紙に書いてみたいの。私だけの物語をね」

「物語って、小説とか？」

「ええ、そうなの」

「へー、素心ちゃんにそんな趣味があるとは知らなかったよ」

「ふふ。でも、まだ書いてる途中だから誰にも教えないでね」

「当たり前、当たり前。ちなみに、どんな物語を書いているの？」

「文学よ」

そう胸を張って答えている素心ちゃんを見て、僕は違う意味で心臓がドキリとしていた。

「へ、へー、文学なんだ……」

「ええ」

「そう……」

何となくだが嫌な予感がした僕は、早々に話しの方向を変えようとした。

が。

その前に、

「ねえ、良ければ読んでみてくれない？ まだ簡易版なんだけど」と、素心ちゃんに頼まれてしまったのである。

美女からの頼み事を断れる男なんて、この世の中には居ない。例え死にかけて爺さんだろうと、鼻でスパゲティーを食べるし、目でピーナッツを噛むだろう。

やがて僕は頂垂れた様子で原稿用紙を受け取ったのであった。

その物語を率直に評価するとしたら、チープの一言で終わってしまった。

主人公の女は、複数の男にレイプされ、初恋だった男からは処女では無い身体はポロ雑巾と同じだと言われ、好きでもない男と結婚するという話である。要するに、色々あったけど普通に幸せですという、現状に不満を抱いている事が多い女性が共感を得やすい演出だった。

さあ、どうしたものか。

「面白かった？」

僕が顔を上げて読み終わった事を察した素心すめこちゃんは、目をキラキラとさせて感想を尋ねてきていた。その顔は純粹じゆんじゆんというか、ほ乳瓶を差し出された時の子犬のようで、股間がムズムズするぐらい可愛かった。

これが告白とか世間話だったら、どんなに良かったものか。

「そ、そうだね。良かったよ」

脇が冷や汗でビッシヨリと濡れていた僕は、やっとの事で喉の奥から当たり障りのない言葉を引き摺り出した。
が。

目の前にいる天真の女性は、それだけでは物足りなかったようである。唇をツーンと尖らしていた。

「良かったって、どう良かったと思うの？」

「それは……」

「私は、まだプロじゃないし、これ簡易版だから遠慮無しに言っちゃおうだい」

「う、うーん」

「ねえ、ちゃんと行って良いのよ。私達、友達じゃない」

「……そ、そうだけど」

「それとも何にも感じなかったとか？」

「……そ、そういうワケでもないんだけど」

「じゃあ、何よハツキリして！」

辺りがざわつく。

素心ちゃんすおんは大学内の往来と言うことも忘れて怒鳴ったのだ。キリリと整った眉毛が歪み、僕のことを怒った瞳で睨んでいた。

やがて、

「……友達だと思ってたのに。本音で話し合える関係だと思ってたのに。だから、秘密の小説を見せたのに。酷いわ！」
と言って、僕の頬をパチンと叩いたのである。

音からすれば、爆竹みたいなものだろう。

だが、女性に叩かれた事がない人には分からないかも知れないけど、ビンタって奴はこれはこれでかなり痛い。目玉から火種が飛び出し、鼻の奥がツーンとしてくるぐらいの打撃なのだ。

「あ！ 待って、待ってよ！」

僕は頬と首を教えながら、怒って歩き出してしまった素心ちゃんすおんを追いかけたのだった。

しかし、だ。

追いついたとして、僕は何といえはいいのだろうか。

仮に、文学が嫌いだと本音を話したとする。当然、他人が本気で描いた作品を、こっちの理由だけで全てを拒否してしまえば嫌われちゃう可能性が高い。

また、仮に文学が好きだと嘘を付いたとしよう。素心ちゃんすおんが求めている言葉を察し、変化球を付けた形で誉めてあげればきつと喜ぶだろう。ただ、友達を騙したという後ろめたさと心労が溜まるだけで、全ては丸く収まる可能性が高い。

僕はどっちを選べばいいのか。

素心ちゃんすおんに追いつく2・3秒前に、それ決めなければならぬ。それが問題だった。

「いやー、最高だよ！ この人間関係が織りなす多感な悲哀！ 苦しみと憎しみ、そして痛みと性欲を無くして本当の愛は語れない。とてもじゃないけど素人が書いた作品とは思えないね。さっきはさ、上手くこの気持ちか伝えられるか分からなかったから黙ってしまっただよ！」

僕の選択は、後者だった。

本当のことを全て話した挙げ句、自ら他人に嫌われるような事をするのはモラルとして間違っているし、落とし所を見付けて付き合っていくのが友達っていうものだと思っただからだ。

「そうかー、ありがとー。少し自信が付いたよー」

本当に嬉しいのか、僕に誉められて素心ちゃんすまろは頬を赤くして笑っていた。

「いやいや、こんな感想を言うのなんてお安いご用さ」

おっと、僕のことを美女に好かれないだけの安っぽい男だと勘違いしないでくれよ。女性を怒らせたり泣かせる趣味でもない限り、大抵の男子は同じようなことをしたと思うね。

それに最初、性欲、暴力、弱者の3つに踊らされているのが文学だつて言っただろ。まさに、悩んだり、叩かれたり、性欲が沸いたりしていた僕の行動が、文学そのものだったとは思えないだろうか。

そう考えるとき。

文学も、そう悪いものじゃないって思えるようになったんだよ、僕は。

「ありがと。こんなに誉められたの初めてだから嬉しいわ」

素心ちゃんすまろは僕から原稿を受け取ると、鞆たもとにしまっていた。

その姿を僕は満足そうに眺めた。

寧ろ君のお陰で、あんなに嫌いだった文学が好きになってきたという気持ちを伝えたかったが、全部を話すワケにも行かないので止めておいた。

「本当のことを言ったままでだよ」

「なんか照れるなあ」

「いやいや、こういうものは大いに受け入れた方が良いでしょう。反省なら後でも出来るしね」

「ふふ。そこまで君に誉められたのなら、彼氏に見せても良いかもしれない。文学を書いた方が良くって薦めてくれたのも彼氏なの」

「え」

「あ、ごめん。当てつけで言ったわけじゃないの。ただ、やっぱり彼氏には変な所を見せなくなかったし、君になら見せてもいいかなって思ってた……」

「え」

僕は目が点になっていた。

「でも、変な事を言っただけで本当にゴメン。さっき無意識に他人を傷つける言葉がある、って自分から言ったのに。バカだよ。でも、私も反省するから、おあいこって事で良いよね」

「え」

「早速、見せに行くから、じゃあね。本当にありがとう」

そう呟く素心ちゃんすこころちゃんの顔は初心しんしんに満ちており、この世のどんな宝石よりも輝いていた。

「え」

ゆっくりと離れていく彼女の後ろ姿を眺めつつ、暫くの間、僕は動くことが出来なくなっていたのだった。

「え」

そして、また文学なんて大嫌いだと僕が言うようになったのは、それから太陽が完全に沈んでしまった8時間も後の事であった。

こんな時だから

200文字

こんな時だから、家族が集まって話しをしていた。

女「こんな時だから、高くても水を買ったわ」

男「こんな時だから、高くてもコーヒーが無いとな」

婆「こんな時だから、高くてもミカンぐらい良いでしょ」

少女「こんな時だから、高くてもケーキは必要よ」

少年「こんな時だから、高くてもPSS3を買ったよ」

中年女「こんな時だから、高くてもホテルにツインで行ったわ」

中年男「こんな時だけど、私以外の誰とホテルに泊まったんだ？」

携帯電話 ? 200文字

私は携帯電話を拾った。それには大切な未来を一瞬だけ教える、という変なアプリが入っていた。そんなの始めは疑ったが、これは本物だった。なんと雨や事故や数字当て宝くじさえも的中したのだ。私は大金持ちになった。

これがあれば私は永遠に幸せになれる。

ただ、一瞬しか表示されないのが問題だった。見逃してしまうかも知れない。私は携帯を見続けた。

すると友人が言った。

「お前な、携帯ばかり見てると大切な友達をなくすぞ」

携帯電話 ? 200文字

「お前、そんな携帯使ってるのよ」

「っーか、キモチわりいよな、お前の携帯」

そんな風にバカにされた僕は悔しくて泣いてしまった。

「この携帯はお仕事をしているパパが、僕に買ってくれたんだぞ！
そりゃ、ずっと血を吐いてるし、目からビームが出るし、何かネ
バネバしてるし、尻尾やトゲが生えてるから通話をするとき頬が痛い
し、夜中の二時とかに吠えるし、時々噛み付くからバーちゃん殺さ
れたけど、僕にとって宝物の携帯なんだ！」

携帯電話？ 200文字

私は最新の携帯電話を買った。それは128TBという容量だったので、まず私は80万種類のアプリをダウンロードし、8種類のSNSで発言し、3万種類のオンラインゲームを多重起動し、8人と通話し、1つの動画をずっと再生し続けたのだ。

すると携帯画面がパカッと開いて、汗だくの小さいオッサンが顔を出してきた。

「もう、無理！ お願いだから、どれか一つにして」と言っ
て、画面を閉じていた。

私は中の人も大変だなと思った。

「福岡の方に、面白い昔話が残ってるよ」

「どんな？」

「ある村に未婚の若い娘さんが居たが、ある時、庭の木が悪さを始めた。それを止めようと、娘の父親は木と相撲をとったのだ」

「それで？」

「いや、終わりだよ」

「は？ オチは？ 未婚や相撲は伏線でしょ？」

「違う違う、そういう意味は全くないの。ちなみに似た話しが他にも沢山あるぜ」

「……昔の人も、オチから開放されたかったのかもな」

うんうんと、小説家の卵達は頷いていた。

2人の会話 200文字(後書き)

福岡の昔話しは本当です。

携帯電話？ 200文字

私が落ちていた携帯電話を拾うと、画面には気味の悪い女が表示されていた。一緒にパラメーターが出てたので、たぶん育成系アプリだろう。

育てるのに失敗したなと嘲笑いつつ、私は携帯を捨てた。

だが、帰宅するとPCにあの女が映っていたのだ。それを消してもTVや窓や電球にまで見える。このままでは殺されると思った私は慌てて部屋中の物を捨てた。

だが、それでもあの女は部屋にいた。

いつまでも私の眼球に映っていたのだった。

携帯電話 ? 200文字

私が拾った携帯電話の機能は最先端だった。体温や体調の変化を
探知し、周囲の毒物や薬物や火薬や地震や津波や金属反応を探査し、
何か一つでも異変が分かるとアラームが鳴る。しかもボタン一つで
信号と通行中の車が操れ、電波や録画を止められ、100メートル
おきに設置された隠しシエルターが姿を現したのだ。
これは誰の携帯なんだろう。

その頃、官邸で。

「どうました、総理」

「あ、ミスったな。俺の専用携帯を落としてみたんだ」

鳥合の衆 200文字

「今ある発電所は私が有向に使おうじゃないか」

「待て、ここはお前だけのモノではないぞ」

「そうだ。こんな時なんだし、弱いモノから使わしてくれよ」

「それは自分が欲しいから弱者になってるだけだろ。本当の弱者は、こんな所には来ないぞ」

「そうだ、弱ったフリなんかするな」

「じゃあ、誰が使えば良いんだ」

それを見て子供が尋ねた。

「ママ、電柱の上で何て言ってるの？」

「あれはね、鳥さん達が餌の縄張り争いをしているのよ」

携帯電話？ 200文字

呼び鈴が鳴ったので、私が扉を開けるとメイド服の女が居た。

「私は未来からやってきたメイド形携帯電話です」

「ですか」

「はい、料理も洗濯もテレビも掃除もゲームもネット機能も私には付いてますよ」

「それは凄い。ちなみに通話はどうやるの？」

「私の顔で操作します。口が受話器で、眼球のガラスがディスプレイ、耳でアドレス帳が動き、鼻が決定ボタンに……」

「通話中に人間の顔なんか見たくないわ！」

と言つて私は扉を閉じた。

呼び鈴が鳴ったので、私が扉を開けるとメイド服の女が居た。

「私は未来からやってきたメイド型携帯電話です」

「そうか」

「以前から不評でしたので、メイドと携帯の機能は別ける事になりました」

「なるほど。でも、それだとお前はメイド型携帯電話ではないだろ」

「いいえ」

「なんで？」

「機能は別れましたが、携帯を充電するには私の口の中に突き刺す必要がありますので……」

「気色悪いわっ！」

と言って私はドアを閉じたのだった。

携帯電話？ 200文字

マンションの一室で殺人事件が発生した。その部屋には夥しい量の血が広がっており、下の階の天井にまで浸透していた。

殺人の部屋に住む妻が消えていたので、警察は直ぐにその夫を逮捕した。しかし、どんなに探そうとも死体は見付からなかったのだ。どこに死体は消えたのだろうか。

そう警察が苛立った時、携帯が鳴ったのだ。

音の元を探すが、誰の電話でもない。

呼び出し音は夫からだった。

携帯は夫の口の奥から静かに鳴り続けていた。

携帯電話 ? 200文字

「一緒に写真を撮りましょう」と、お見合いで結婚した彼女に頼まれた。僕は照れながらも喜んで携帯で撮影した。

その翌日だ。

彼女が死んだのは。

心不全だと医者に説明されるも、突然すぎて僕には理解できなかった。親の会社を辞め、泣き続けた。

納骨後、火葬し忘れた携帯を手にしていると、僕は心底驚いた。

死後の彼女が写っていたのだ。

元気に笑っていた。

知らない男と裸で抱き合って。

そんなに僕が嫌いだったのかと、また泣いた。

俺が家でAVを見てたら、友達から電話が来た。

「うつす。悪いけどネットで地図検索してくれ」

「道に迷ったのか？」

「ああ。酔って目が覚めたら、真っ暗で人気のない山中に居るんだよ」

「それだと検索はムリだろ」

「ええ、マジかよ」

「……って、お前の携帯、今どこ検索機能があるじゃん」

「あ、そうか」

と、友人は一旦電話を切り、折り返してきた。

「なんか当分、帰れそうにないみたい」

「なんで？」

「携帯に地獄って出てるから」

携帯電話？

呼び鈴が鳴ったので、私が扉を開けると綺麗な女が立っていた。

「私は未来からやってきた、デリバリーヘルス型携帯電話です」

「チェンジ」

「ええ、ソツコーはヒドイですよー。まったくもお」

と、綺麗な女はめんどくさそうに右手を上げ、独り言を口にしていった。私ではない誰かと通話をし出したらしい。

「あ、店長、チェンジらしいですよ。ああ、はい、はい。え、客に断った理由を聞くんですか。分かりました」

「……」

「あのお客様、チェンジつて、なんでです？」

「テメーとやってると、そうやって誰かに聞かれそうでイヤだからだよー！」

と言って私は扉を閉じたのだった。

私は30年掛けてタイムマシンを完成させた。

嫌われている彼女との未来を変えるために作ったのだ。

「それだけ愛してるんだ、私は」

それから私はタイムマシンで過去を改ざんする。

でも、彼女に嫌われたままだった。私という個を好く可能性は始めからゼロだった。

「もういい……」

人生に嫌気が差した私は自殺用の毒薬を飲んだ。そして最後に知人と合うと尋ねられた。

「なんで彼女の気持ちを変えるなら、洗脳装置を作らなかったの？」

正しいタイムマシンの使い方

200文字(後書き)

三千文字を二百文字に変えてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0167m/>

会津遊一 短編集

2011年3月30日12時42分発行